

県北やませ地帯におけるスプレーギクの栽培法

(園試高冷地開発センター)

1. 背景とねらい

本県では、りんどうに次ぐ花きの主要品目の確立を目標として推進しており、沿岸部でも特有の気象条件を活用し集約的なスプレーギクの産地化を模索している。しかし、導入されてまもないため、技術蓄積や新品種導入の経験が少なく、栽培が安定化せず有利販売に結びつかない問題をかかえている。また年次によっては、シェード栽培でやませ地帯の多湿環境とあいまって白さび病が多発して問題となっている。そこで、花と野菜のやまびこ産地育成事業の中で県北やませ地帯におけるスプレーギクの栽培法を検討してきたところ、成果が得られたので参考に供する。

2. 技術の内容

1) 夏秋ギクタイプと秋ギクタイプのスプレーギクを組み合わせることにより、7月下旬～11月までのほぼ4か月間にわたって出荷が可能となる。

2) 品質向上技術

(1) 夏秋ギクタイプの品種では花房形などの品質向上のために電照が必要である。また、9月咲きの中にはエテホン液剤利用により花房形の向上する品種が多い。

エテホン液剤の処理は2回とし、摘心時とその10～15日後に実施する。処理濃度は250～300ppmとし、株当たり2～3mlを散布する。

(2) 秋ギクタイプの品種では季咲き栽培でも花房形向上のため電照を導入する。採花時期は無電照よりやや遅れる程度である。

電照の開始時期は摘心時とし、電照の打ちきり時期は摘心後発生した茎長が25cm前後、節数で6～7節時を目安とする。

3) 適応地域 県北やませ地帯

3 指導上の留意事項

1) 多湿環境となるやませ気象下でのシェード栽培は白さび病の発生を助長するため、当地帯ではシェード栽培を中心とした開花調節、品質向上技術の導入を避ける。

2) 夏秋ギクタイプの電照については、平成5年度指導上の参考事項「夏秋ギク型スプレーギクの電照効果」に基づいて行う。秋ギクタイプの電照法も同様に行う。

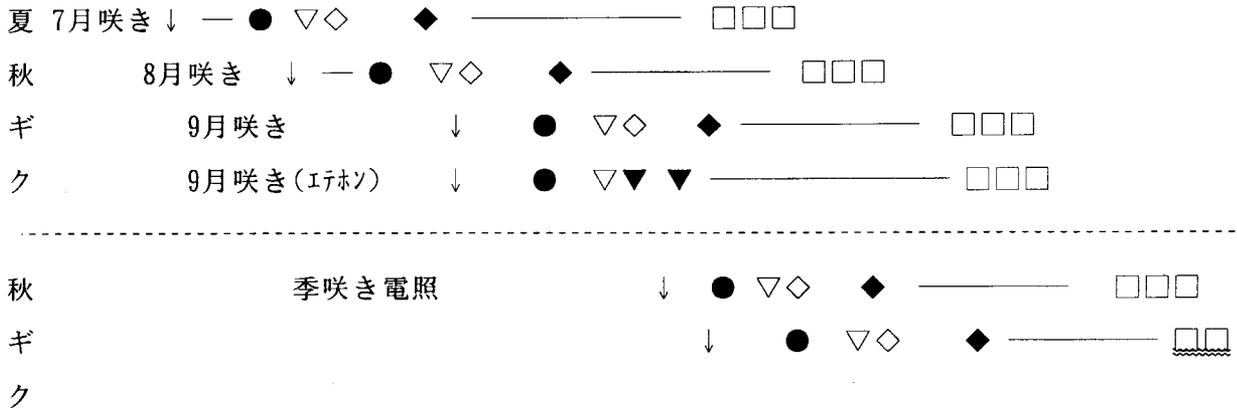
3) エテホン液剤処理の効果は品種及び栽培時期によっても異なるため、効果の安定した品種で行う。新しい品種で行う場合、事前に効果確認をする。

4) 品質の良いスプレーギクの茎の太さはほぼ6mm前後のため、肥培管理の適正化に努める。肥沃なハウスでは茎が太くなる傾向なので、基肥を減肥する。追肥は花卉形成期以降、早い時期が望ましいが、遅くとも出蕾始期に実施する。

5) 低温期の11月は品質確保のために最低温度を13℃以上に保つ。

[県北やませ地帯におけるスプレーギク栽培体系図]

時期	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	
タイプ	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中



↓:挿し芽 ●:定植 ▽:摘心 ◇:電照 ◆:電照打ちきり ▽:エテホン散布 □□□:採花
 ≡≡≡:補助暖房

6 試験成績概要

表1 夏秋ギクタイプの電照による生育、品質(平成6年)

品種	電照	生育(6月15日)		採花時品質					調査時期 (月・日)	採花適期 (月・日)
		茎長 (cm)	節数 (節)	茎長 (cm)	節数 (枚)	花蕾数 (花)	切り花重 (g)	花房形		
ハレリーナ	有	32.5	11.1	131.6	38.4	27.0	104	3.0	8・10	8・10
	無	26.3	11.5	79.2	20.6	13.4	65	2.0	7・26	7・26
カリナス	有	30.6	7.4	135.8	27.8	11.8	68	3.0	8・10	8・12
	無	27.8	8.0	120.6	25.0	13.0	75	2.0	8・10	8・8

表2 エテホン液剤(エスレル10)利用による生育、品質(平成6年)

品種	エスレル 処理回数 (回)	生育(7月11日)		採花時品質					調査時期 (月・日)
		茎長 (cm)	節数 (節)	茎長 (cm)	節数 (節)	花蕾数 (花)	切り花重 (g)	花房形	
アソシジ	0	27.6	7.6	133.9	35.4	35.8	74	3.1	9・27
	2	14.3	11.5	135.0	48.0	26.2	63	4.0	〃
ケベック	0	26.3	7.7	133.6	37.0	19.0	71	2.4	〃
	2	22.1	10.9	142.3	48.6	17.0	63	3.0	〃